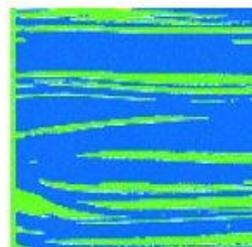


日本行動分析学会ニュースレター

# J-ABAニュース



2023年 夏号 No. 112 (2023年7月31日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 山岸 直基

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内

FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>

E-mail : [j-aba.office@j-aba.jp](mailto:j-aba.office@j-aba.jp)

---

## 目次

<訃報> 坂上貴之・本学会前理事長のご逝去.....	武藤 崇 2
. 理事長退任のご挨拶.....	武藤 崇 3
<参加記> ABAI に参加して.....	別府 奈洋 4
<参加記> 第8回 医療行動分析学研究会に参加して.....	野瀬 珠美 6
<開催記> 第11回 臨床行動分析カンファレンス開催記.....	瀬口 篤史 10
<告知> アジアパシフィック PBS 国際大会が日本で開催されます.....	大対 香奈子 12
ニュースレター編集部座談会「私達の担当期間、終わりだってよ」.....	ニュースレター編集部 14
編集後記.....	16

---

<訃報>

坂上貴之・本学会前理事長のご逝去

武藤 崇  
(同志社大学 心理学部)

坂上貴之先生が、2023 年 3 月 22 日にお亡くなりになりました。

坂上先生は、2003～2006 年には事務局長、2015～2019 年には理事長として、本学会の維持・発展にご尽力くださいました。特に、理事長在任中は、本学会の一般社団法人としての安定的な運営のためにきめ細やかな対応をしてくださいました。坂上先生のご生前のご功績を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

2023 年 5 月 13 日  
一般社団法人日本行動分析学会  
理事長 武藤 崇

## 理事長退任のご挨拶

武藤 崇  
(同志社大学 心理学部)

2023年6月3日をもちまして、本学会の理事長を退任することとなりました。4年間にわたる会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。

思い起こせば、就任後1年が経過し、理事会運営も軌道に乗りつつあった矢先に、新型コロナウイルスの感染拡大という「未体験な事態」が生じ、その後は、その「コロナ禍」対応に追われた3年間でした。比喩的言えば、「視界が悪く、波も荒い海の中で、中規模の船舶の舵取りをする」ような難しさがありました。というのも、一般社団法人は「定款」に基づいて運営がなされているのですが、「コロナ禍」という想定外の事態だったために、それが逆に「足かせ」となり、その結果、迅速かつ柔軟な対応ができないこともあったからです。

実際の「コロナ禍」対応の中で特筆すべき事項としては、まず「新型コロナウイルス感染症学会対応ワーキング・グループ」(委員長:石井拓先生(和歌山県立医科大学))を設置し、行動分析学を活かした国内外の取り組みや実践例をまとめていただきました(<https://j-aba.jp/library/corona.html>)。この知見は、今後の類似の状況が生じた場合(そのようなことがないことを祈っております)に有益な情報となるかと思えます。丁寧にご対応くださいまして感謝申し上げます。

また、年次大会の開催については新規なトライがさまざまに必要となりました。そのような中でも、学会員の皆様からの多大なご協力により年次大会の機能は果たすことができたのではないかと(もちろん、ご不便をおかけした点は多々あったはずですが)と思っております。特に、2020年度年次大会では、吉岡昌子先生、樋口義治先生(愛知大学)には、急遽、オンライン開催

(Zoom主体で)に切り替えていただくというご負担をおかけすることになりました。2021年度年次大会では、本学会初の理事会主体による開催方式で、RemoやoViceといったオンラインイベントツールを利用した「反転授業方式」の実施形態を採用し、多くの若手の先生方のご尽力により、なんとか乗り切ることができました。さらに、2022年度年次大会では、約1週間にわたる「オンライン開催→オンサイト(リアル対面)開催」(通称、「祇園祭」方式)での開催になりました。オンサイト開催の主催は、麦島剛先生や同僚の先生方(福岡県立大学)には、さまざまな制限がある中、オンラインによるハイブリッド形式にもご対応いただくというご負担をおかけすることになりました。

以上のように(ご紹介したのは一部に過ぎませんが)、多くの学会員の皆様から、緊急事態にもかかわらず、多岐にわたって、ご協力をいただきました。この場をお借りして厚く感謝申し上げます。

その他、理事会、総会などをZoomによるオンライン会議形式に完全移行し、その結果として経費削減がなされ、学会定款の精査等のために顧問弁護士の相談を仰ぐことも可能になり、一般社団法人としての運営にも一定に進捗がありました。

今後は、山岸直基・新理事長にバトンタッチすることになります。今回の「コロナ禍」を経て、新たに明確になった課題などを中心に改善・改革がなされ、さらに充実した学会運営となること願いながら、退任の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

最後に、学術学会は、会員の相互扶助をその根幹として成立する組織です。引き続き、会員の皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

## <参加記>

# ABAI に参加して

別府 奈洋

(東京家政大学大学院 人間生活学総合研究科)

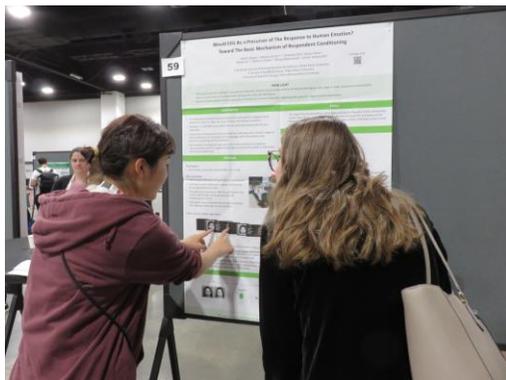
修士 2 年の別府奈洋と申します。作業療法士として働きながら、研究に邁進しています。この度、2023年5月に Denver で開催されました Association for Behavior Analysis International (ABAI) に参加し、ポスター発表をして参りましたのでご報告させていただきます。

日本に生まれ早数十年、以前あれほど学んではずの英会話話は全て流れ去り、「アメリカでポスター発表をする」というお誘いを頂いた時、正直に申し上げると「私は無理だろう」と真っ先に思いました。大変後ろ向きな書き出しで申し訳ありません。とはいえ海外は初めてではありませんでした。前回経験した 2 週間の語学留学では、電子辞書を片手に意気揚々とコミュニケーションを図るも、単語とボディランゲージでしか意思疎通が出来ない事実で愕然とし、初日にホームシックになったのでした。ですが今回は信頼している先生方や同級生の仲間もいる為、大丈夫だろうと参加を決意致しました。そして乗り込んだ機内で酔い、倒れ、頭をぶつけて氷嚢と共にアメリカの地に降り立つこととなりました。

人生初のアメリカは見るもの全てが新鮮でも楽しい時間を過ごすことができました。そして ABAI に参加して様々な気づきや学びがありました。まずは日本以外の場所でここまで多くの方が、自分の疑問点や明らかにしたいことに全力を注いでいるという点です。私の英語力の拙さで全てを理解することが叶わなかった事が残念ですが、よく使われる単語や全体の構成を掴むことで日が経つ内に理解できる内容が

増えていった点も嬉しく思いました。

私の発表の題目は、「Would EEG be a precursor of the response to human emotion? Toward the basic mechanism of respondent conditioning」です。怒り表情などのネガティブな刺激に対する脳波計測を行い、不安誘発のメカニズムを明らかにする行動神経科学の研究です。興味を持って、聞きに来てくれる人も多かったことが嬉しかったです。(左が私です。)



自分自身のポスター発表に向けて、今一度どのような質問を頂くか考える時間を持ちました。それにより、客観的に研究を見直して理解を深める視点を持つことが出来たことも、有意義な経験となりました。

また、University of North Texas の April Becker 先生と、行動分析学と神経科学とリハビリテーションについて、話ができたことも大きな収穫でした。

自身の研究に対し常に客観的に見る習慣を今

後も大切にしていきたいと思います。



ABAI の最終日にはダンスパーティーがありました。踊りと言えばソーラン節や盆踊りの血が流れている人間としてはかなり勇気のいる事でしたが、いざ踊ってみると人々の輪に入ることや、その場の雰囲気自体を楽しむことに意味があり、踊りの出来栄は気にすることでは無い

ということに気が付きました。

日本に帰国して、まず空港でおにぎりとお味噌汁を食べました。アメリカの食事もとても美味しかったのですが、米と味噌がこんなにも美味しい物なのかとようやく気がつきました。離れてみて分かる良さとはこのことか、とお味噌汁を頂きながらしみじみとしました。

最後に、今回ポスター発表を行うにあたり、東京都立大学の山本淳一先生、コレムラ技研バラスト事業部の是村由佳先生をはじめ、多くの先生方のご指導をいただきました。また ABAI の期間中にも、山本先生が我々のようなりハビリテーションを専門とする学生でも理解し易い演題を事前に選定し、学会の楽しみ方や勉強の仕方をご指導くださいました。実りの多い貴重な経験をさせていただけましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。

<参加記>

## 第 8 回 医療行動分析学研究会に参加して —手術室看護師の行動に対する課題分析の試み—

野瀬 珠美

(滋慶医療科学大学大学院 /

地方独立行政法人大阪市民病院機構 大阪市立総合医療センター)

### 1. 第 8 回 医療行動分析学研究会への参加

2023 年 5 月 7 日に、第 8 回医療行動分析学研究会が大阪医科薬科大学で開催されました。新型コロナウイルスの影響で、さまざまな学会や研究会がオンライン開催で行われる中で、久しぶりに対面で研究会が行われたと存じます。

私はちょうど滋慶医療科学大学大学院を修了したばかりでした。2 年間の修士課程を修了した直後に、私をご指導をいただいている飛田伊都子先生より本研究会での発表のご推薦を頂きました。私が考える本研究会は、行動分析学に対して非常に高い知識をお持ちの方々が参加され、またそれらに対して、たくさんの活動をされている方々がご発表されるという印象でした。お話をいただいたときは、有難いお話ではありますが、いわば行動分析学に対して、学び始めたばかりの新参者である私が発表できる場ではないと思い、非常に不安で一杯でした。しかし、人生の中で、このような貴重な経験の場は、待っていても来るものではありません。「私には無理です。」とお断りすれば、このお話はこれまでです。奇跡の中で生きている私にとって、ここで頑張らなければ自分の成長にも繋がらないと思いました。

発表の日は大雨でした。もちろん朝から過緊張の状態会場に向かいました。発表者のお部屋にご案内をしていただき、鎌倉やよい先生をはじめ、教育口演をしていただきました山本淳一先生、座長をしていただきました石井拓先生、当日ご発表される先生方とご挨拶をさせてい

ただきながら、雲の上の方々がおられるお部屋に居ることに違和感を覚えていたことを思い出します。そして、発表の順番を待ちながら、前の発表者の方々の行動分析学的研究の素晴らしさを感じたことも記憶にあります。

### 2. 行動分析学との出会い

私が行動分析学と出会ったきっかけは、飛田伊都子先生との出会いでした。私は昔から大学院で学びたいと思っていましたが、仕事との両立や能力的な不安から断念していました。しかし、今回職場の上司から大学院を強くすすめられ実現することができました。大学院で行う研究は、指導教員の指導を受けながら行えるということもあり、今まで経験したことのない研究を取り組みたいと思っていました。私は 30 年近く手術室看護師として働いてきました。その中でスペシャリストとして、長きに渡り手術室看護師の教育に携わってきました。手術室看護師の業務は病棟看護師とは違い特殊であるため、教育に時間を要することと、経験値が重要になってくる業務であり、スペシャリストの育成は容易ではありません。新人看護師の教育から、長きに渡りあの手この手で育成方法も変えてみましたが、画期的な育成方法には出会えませんでした。

大学院のお話に戻りますが、私はすすめられた上司から指導教員は別の教員をすすめられていました。しかし、入学後にその教員が退職されることを知らされました。その時は頭の中

が真つ暗になりましたが、今思えばそれが無かったら飛田先生との出会いもなく、指導を受けることは出来なかったと思います。大学院では飛田先生といえば「行動分析学」の先生でした。手術室看護師の育成の中で、行動分析学が活用されている実態は、日本手術看護学会の中でも聞いたことがありません。しかし、私の中の課題は明確であり、もしかしたら手術室看護師の育成が行動分析的介入で出来るかもしれないと思いました。行動とは、「個体がなしていること」を指し、観察や測定が可能なものとされています。行動は物理的な環境や社会的な環境に影響すると言われており、この環境事象を操作することで望ましくない行動を、望ましい行動に変容させることができるとされています。

応用行動分析的介入の効果については、患者・医療者・学生など、医療分野の様々な場面で活用されています。手術室看護師の行動の中には、どのようなオペラント行動と強化子があるかを考え、現行のマニュアルを活動して介入が出来れば、今よりも良い教育効果が得られるのではないかと考えました。飛田先生に長い時間をいただき手術室看護師の教育に関する喫緊の課題と、行動分析的介入により良い効果が表れる可能性についてお話をさせていただきました。

### 3. 手術室看護師の教育に関する課題

手術室看護師の教育には、約3年を要しています。そこからスペシャリストになるには更に期間を要するうえに、スペシャリストになるための教育方法はなく、それぞれの看護師が独自の方法で極めていきます。中には約3年の研修期間を終えるとスペシャリストまでは望まず、病棟への配置換えや退職を希望する看護師も多くスペシャリストと呼ばれる手術室看護師まで到達し難い現状の課題があります。しかし、近年の手術医療は高度で複雑な現状であるため、これらの手術が滞ることなく医師がスムーズに

手術に挑めるように、手術室看護師も高度な知識と技術を備えなければなりません。しかし、ここに至るまでには長い年月と経験値が必要になります。

### 4. 手術室看護師の行動に対する課題分析

手術室看護師の育成に長い年月を要する理由の一つとして、業務が複雑で特殊であること、さらに様々な医師が手術をおこなっていること、手術を受ける患者の解剖や病態がそれぞれ個別的であるということなど沢山の背景が混在しているからです。

そこで本来介入研究を行いたかったのですが、飛田先生ご指導の下、まず複雑な手術室看護師の業務がどのように行われているか、行動を分解し望ましくない行動、つまり新人看護師にあつてスペシャリストにない行動と、望ましい行動、つまりスペシャリストにあつて新人看護師にない行動を見つける課題分析を行うことになりました。これが今回の医療行動分析学会で発表した私の研究になります。

課題分析の道のりは非常に困難でした。まず、手術場面での看護師の行動をビデオ撮影し、対象場面の看護師の行動を1秒ごとに記録しました。最初は行動が生起するたびに記録をする予定でしたが、手術室看護師の行動は常に動いており、1秒ごとの記録が必要でした。対象場面の行動は平均1000行動以上であり、今回の研究では、手術室看護師の行動をカテゴリー化ができ、その行動の中で新人看護師とスペシャリストの違いが幾つか明らかになりました。これを今後の手術室看護師の育成に役立てたいと思っています。

### 5. 発表を終えて

今回このような貴重な研究会で発表と、行動分析学会ニューズレターに投稿させていただく機会をお与えくださいました、飛田先生をはじめ沢山の方々に感謝いたします。

今回の研究会は、発表時間が20分間で、質疑

応答時間は約 40 分間と本当に長い持ち時間であり、この 40 分間の間に沢山のご質問をいただきました。壇上では一つ一つのご質問に必死に回答させていただきましたが、正直緊張のあまり自分でも辻褃の合わない返答もあったと反省ばかりが残っています。十分な課題分析までの道のりは長いと感じた結果が、今回の研究会で沢山いただきましたご質問であると思っています。自分の研究の中で自問自答することが沢山あり、試行錯誤の中で進めていった研究でした。飛田先生をはじめ沢山のご指導とご支援をいただきながら、自分一人では決してできない研究であると思っています。しかし、課題はたくさん残っていますが、これからも日々精進しながら、自分の進めていくべき研究を続けていきたいと思

います。そして、近い将来行動分析学的介入研究を行いたいと思います。

#### 文献

坂本貴之, 井上雅彦: 行動分析学 行動の科学的理解を目指して. 有斐閣, 東京, 2018.  
ジョン・O・クーパー, ティモシー・E・ヘロン, ウィリアム・L・ヒュワード著, 中野良顯訳: 応用行動分析学 第3刷. 明石書店, 東京, 725, 2018.

## <開催記>

# 第11回 臨床行動分析カンファレンス開催記

瀬口 篤史

(西知多こころのクリニック)

2023年5月21日に、名古屋にて第11回臨床行動分析カンファレンスを開催いたしました。この度、ニューズレターに開催記執筆のご依頼をいただきましたので、カンファレンスの開催内容をご報告させていただきます。

臨床行動分析カンファレンスは、精神科臨床における応用行動分析、とりわけ臨床行動分析にもとづいた実践と、それを通したクライアントへの貢献をテーマとした研究会で、2017年より年2回開催してきました。これまでに開催したワークショップの内容は、応用行動分析・臨床行動分析の基礎理論、標的行動の選択、精神科臨床における行動測定、シングルケースデザイン、セルフモニタリング、言語行動理論と関係フレーム理論などが挙げられます。

第11回目の開催となる今回は、午前中に柳澤博紀先生(犬山病院)にご登壇いただき、ワークショップ「臨床行動分析に基づく治療関係構築入門」を開催いたしました。このワークショップは、第一部「臨床行動分析からみた治療関係」、第二部「“役割モデル”として“柔軟”なセラピスト」、第三部「初回面接ロールプレイ」の3部で構成されていました。第一部の「臨床行動分析から見た治療関係」では、治療関係を、セラピストの行動とクライアントの行動の相互作用として定義し、カウンセリングに積極的ではないクライアントに直面した際に、どのような反応が生じるかについて、参加者自身が自分の体験を観察するエクササイズが行われました。第二部の「“役割モデル”として“柔軟”なセラピスト」では、ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー)の視点から、望ましいセラピスト

の態度である「オープンである」「アクセプタンス的である」「筋が通っている」態度について解説されました。その中では、応用行動分析家の基本的な態度である「学び手は常に正しい」についても解説されました。第三部の「初回面接ロールプレイ」では、生物-心理-社会モデルに基づいたアセスメントの流れや、クライアントへの聞き方のテクニック等について解説され、ロールプレイが行われました。クライアントとセラピストの協同的な治療関係は、技法や流派の違いを超えて、セラピーの効果に強い影響を及ぼすことが示されています(Wampold & Imel, 2015)、今回のワークショップは、望ましい治療関係を構築する文脈を創り出すセラピストの行動を体験的に学ぶことのできる、とても貴重な機会となりました。

午後は、嶋大樹先生(追手門学院大学)に座長を務めていただき、トークセッション「臨床現場の知恵袋～みんなこんな時どうしてる?～」を開催しました。この企画は、若手や駆け出しの実践家の臨床における疑問・悩みを、フロアの方々とともに考えるものです。今回は高橋まどか先生(久喜すずのき病院)に、臨床実践に関する次の4つの質問を挙げていただきました。

①「主訴が明確ではないクライアントの標的行動を設定する際に意識していることはありますか?」、②「クライアントの表向きの主訴に振り回されない工夫や練習はありますか?」、③「標的行動を決めたタイミングで介入をする場合、ベースラインをどのように設定していますか?」、④「標的行動を死人テストに引っかからないように設定する工夫(練習)はありますか?」

これらの質問に対して、嶋先生やフロアの方々とともに議論が行われました。どの質問も現場で臨床家が直面することのある重要な疑問であり、登壇者の日頃の臨床実践の様子をうかがい知ることのできる、興味深いトークセッションとなりました。特に①や②に関しては、クライアントの生活の実態を把握するための生態学的アセスメントや、それを通してクライアントが「どこで困っているのか」を特定することの大切さが改めて強調され、中身の濃い議論が行われました。

カンファレンスの最後は、事例検討が 2 事例行われました。1 事例目は、兒玉和志先生（いなざわこころのクリニック）に、事例「対人関係の不調などを理由に休職に至ったと考えられる男性へのアセスメント」をご発表いただきました。事例の詳細は省きますが、広範なアセスメントを行われ、クライアントの言語行動の文脈を細かく分析して、それに基づいて介入方法を立案された、大変興味深い事例でした。兒玉先生の事例のコメンテーターとして、吉岡昌子先生（愛知大学）にご登壇いただきました。吉岡先生は、「価値の明確化と反応バリエーションの増大」等に関してコメントをされ、イライラした状態における反応バリエーションを増大させるにあたってのスマールステップのつくり方などが解説されました。フロアの方々から「吉岡先生のコメントに痺れました！」というコメントをいただくなど、大変鋭いご意見をお聞かせいただきました。

2 事例目は、篠浦友希先生（あいち保健管理センター）に、事例「社交不安障害のクライアントへの注意分散法と行動実験を用いた社交不安傾向への介入」をご発表いただきました。事例では、集団プログラムにおけるクライアントの標的行動を測定されるなど、介入の個別性を高めるための工夫が示された事例でした。コメンテーターは瀬口が務めさせていただき、症状だけでなく、クライアントの生態学的な情報を集める方法について解説いたしました。

今回も多くの方（61 名）にご参加いただき、開催終了後においても議論の延長戦が行われるなど、大変盛会となりました。次回、第 12 回臨床行動分析カンファレンス（2023 年 12 月 10 日）では、先日認知行動療法研究（2023）に掲載された論文「外来臨床における標的行動選定プロセスとその特徴の記述に向けた系統的レビュー」を執筆された、嶋大樹先生、井上和哉先生（立命館大学）、本田暉先生（ウェルネス高井クリニック）、高橋まどか先生の 4 名の先生方に、「外来臨床における標的行動選定プロセス」をテーマとしたワークショップを開催していただくこととなっております。気分や身体症状が主訴となることの多い精神科臨床において、クライアントの独特なニーズや価値観、困難に応じた標的行動をどのように選定するのか。大変興味深いテーマであり、私も今から 12 月の開催を楽しみにしています。

<告知>

## アジアパシフィック PBS 国際大会が 日本で開催されます

大対 香奈子

(第4回アジアパシフィックPBS国際大会日本大会  
実行委員長 / 近畿大学)

第4回  
アジアパシフィック  
PBS 国際大会  
国内・海外のポジティブ行動支援についての最新の実践が  
大阪で学べる絶好の機会です！  
参加登録はこちらから  
早割は9月15日まで！

開催日 2023年11月11日(土)・12日(日)

開催場所 近畿大学 東大阪キャンパス  
<https://www.kindai.ac.jp/>

第4回アジアパシフィック PBS 国際大会が11月11日～12日の二日間にわたり近畿大学で開催されます。この度、日本行動分析学会にも後援いただけることになり、感謝しております。ありがとうございます。このアジアパシフィック大会が日本で開催されるのは今回が初めてであり、これまでは2年に1度、台湾と香港で開催されてきました。

アメリカを中心として広く実践されているポジティブ行動支援が日本にて紹介されたのは2000年代初頭であり、当初は行動上の問題を示す発達障害児者への支援として実践されることが中心でした。2017年にPBSの国際組織であるAssociation for Positive Behavior Support (APBS)に

より日本ポジティブ行動支援ネットワーク (APBS Network Japan; APBS-J) が承認されると、学校現場への学校規模ポジティブ行動支援 (School-Wide Positive Behavior Support; SWPBS) の導入・実践が急速に進み、日本におけるPBSの実践も広がりを見せています。2020年には行動分析学研究にてPBSの特集号も刊行されました。

APBS-Jの立ち上げから6年が経過し、この度このアジアパシフィック大会を日本で主催できることを大変うれしく思っております。基調講演ではブリティッシュコロンビア大学の Joseph Lucyshyn 先生から家族を対象としたPBSの支援についてご紹介いただき、またオレゴン大学の

Kent McIntosh 先生からは継続的で効果的な PBS の実践を学校で行うためには何が必要かというテーマでお話いただく予定です。その他、シンポジウムやパネルディスカッションでは、複数の国や地域で PBS の実践・普及を行っている方を登壇者としてお招きし、それぞれ取り組まれていることをご紹介します。また、ポスターセッションも企画しておりますので、そこではご参加いただく皆様同士の交流や情報交換が活発に行われることを期待しております。大会についての詳細は、大会ホームページに掲載しておりますので、ぜひ QR コードからアクセスください。参加登録等もそちらの大会ホームページからいただけます。

ポスター発表のエントリーはこのニューズレターが発行される頃には締め切られているかも

しませんが、参加登録は早割が 9 月 15 日まで、最終登録期限が 10 月 19 日までとなっております、ただ今絶賛受付中です。大会当日の参加受付はありませんので、ご参加を検討されている方は必ず事前登録をしておいていただけますよう、お願いいたします。現時点ですでに日本を含め 10 か国ほどの方々に参加登録をいただいております。日本と同様に PBS の実践を今まさに発展途上で行っている海外の事例を聞くことは、私たちが日本において、PBS の重要な機能的要素は残しつつも、どのように文化や制度にあった適応を実現していくのかを学ぶ上でも、大変貴重な機会となることと思います。日本からもぜひ多くの方に参加していただきたいと思っています。11 月に近畿大学でお待ちしております！

## ニューズレター編集部 座談会

### 「私たちの担当期間、終わりだってよ」

#### ニューズレター編集部

大久保「さて、今回皆さんに集まっていたいたのは、なんとこの夏号でもって我々の編集チームはお役御免になるそうなのです。それで最後に振り返りも兼ねて軽く打ち上げをしようかなと思って・・・」

近藤「なんと、もう終わりなんですねー。長かったような、短かったような・・・」

八重樫「いつからこのチームで編集をやり始めたんですって？」

大久保「2019年からやね。丸4年くらいやっていることになりますね」

大屋「まあ、とりあえず乾杯しますか！」

全「かんぱーい！お疲れ様ーっ！！」

近藤「最初は小樽大会で声をかけまくって、皆さんに大会関連の記事を書いていただきましたね。懐かしい」

八重樫「しかし、この4年間、世の中はかなりの激動の時期でしたよね」

大屋「ニューズレターの記事のタイトルを眺めても、コロナ関連のものが多いですもんね」

大久保「担当期間がちょうどコロナ禍の入口と出口に重なるくらいやもんね。今が出口かどうかはわからんけど」

近藤「あと、記念すべき100号も私たちが担当することができました！」

大久保「そうでした、そうでした。思い切って大御所の先生方に執筆をお願いして良かったよねー」

大屋「イレギュラーなものとしては、立春・特別号（徹底的行動主義の現代的位置づけをめぐる諸論 討論会）もありましたね！」

八重樫「質・量ともに圧倒的で、もはや『ニューズレター』って何なんだろうという思うくらいの大作でした」

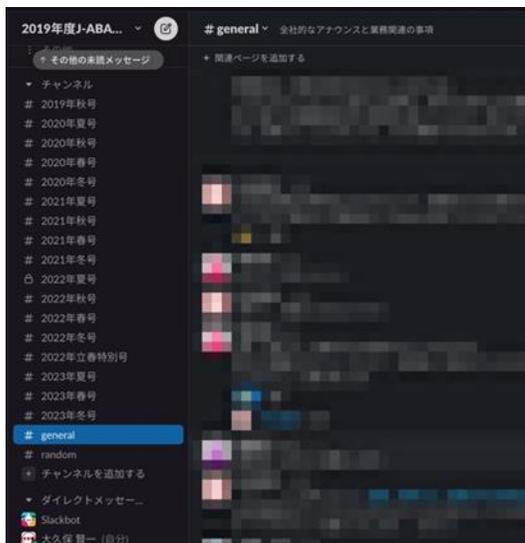
近藤「そういえば・・・学会員の皆さんは気づいていないかもしれませんが、私たちのチームが編集するようになって、いくつかフォーマットを改良した点があるんですよ」

大久保「ほう！・・・なんでしたっけ？（笑）」

近藤「まず読みやすくなるようにレイアウトをゆったり目にしたんです。あと目次から本文の該当箇所にジャンプできるリンクをつけるようにしました！」

大屋「そうでしたね！そういう細かいところも次の編集チームにしっかり引き継がないとですね！」

八重樫「そもそも編集チームで作業を進めるのに Slack は必須でしたよね。これがなかったら大変だったかも・・・」



全「確かに！！」

大久保「各号の記事を読むと、その当時のことを色々思い出しますねー」

このようにニュースレターが創刊された 1995 年の記事までみんなで読み返して、あーだこーだ言いながら、夜は更けていくのでした。

終わり。



## 編集後記

約4年間に渡り、楽しく編集に取り組みさせていただきました。次号より次のチームへバトンタッチいたします。私の誘いに乗っていただき、共に編集作業に取り組んでくださった近藤さん、八重樫さん、大屋さんにこの場をお借りして心より御礼申し上げます。また、記事を投稿してくださった皆さまにも感謝申し上げます。

(大久保 賢一)

無事に任期を終えることができホッとしています！不手際もあったかと思いますが…編集チームの皆さんに助けていただきながら、楽しくお仕事させていただけました。読み返してみるとコロナの影響を感じつつ学会の歴史がしっかりと刻まれた価値のある資料だなと感じます。記事を送ってくださった方、読んでくださった方本当にありがとうございます！

(近藤 鮎子)

小樽での行動分析学会から4年間担当させていただきました。ニューズレターは1995年（なんと私が2歳のころ）に初号が発行され、私達の担当で100号を迎えられたことも感慨深いです。記事を投稿していただいた方や読者の皆さん、編集チームのメンバーへお礼申し上げます。今後は一読者として、楽しみに読ませて頂きます。

(八重樫 勇介)

途中産休・育休で失礼していましたが、約4年経っていたとは！チームの皆さんの柔軟さで楽しくお仕事できました。また、記事を投稿いただいた先生方の熱量を感じ、大変勉強になりました。編集チームに入ったおかげでお声がけできた先生もお喜びかったです。ありがとうございました！

(大屋 藍子)

### J-ABA ニュース編集部よりお願い

- ニュースレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャグやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。
- ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。また、学術的に明らかに誤った記述、学会活動や行動分析学に全く関係のない記事、営利目的と考えられる記事（著訳書等の紹介を除く）、差別的表現や誹謗中傷が含まれる記事等については、編集部より修正を求める場合や掲載をお断りする場合があります。

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2

畿央大学 教育学部 大久保研究室内 日本行動分析学会ニューズレター編集部 大久保 賢一

E-mail: kenichi.ohkubo@gmail.com